アウト・オブ・民藝　秋田雪ゆきぞり橇編

タウトと勝平

1935.1936

展覧会「アウト・オブ・民藝―秋田雪槌編 タウトと勝平」は、秋田公立美術大学とNPO法人アーツセンターあきたによる2018年度「BIYONG POINT企画公募」において採択され、開催する運びとなりました。

デザイナーの軸原ヨウスケと美術家の中村裕太は、これまでの「アウト・オブ・民藝」の活動のなかで、「民藝」の外と内を行き来しながら「相関図」という手法によって民藝運動の周縁的な動向を明らかにしてきました。本展覧会では、1935年と1936年に秋田を訪れた建築家・ブルーノ・タウトと、水先案内人となった秋田の版画家・勝平得之の足跡に着目。軸原、中村に加え、香川から秋田に移住した宇野澤昌樹による秋田でのフィールドワークの成果を公開しました。

本展覧会の開催を記念し、展覧会記録を小冊子にまとめ発行いたします。

秋田公立美術大学　NPO法人アーツセンターあきた

アウト・オブ・民藝
2020.1.18—5.10
秋田雪橇編
タウトと勝平
1935
1936

アウト・オブ・民藝とは

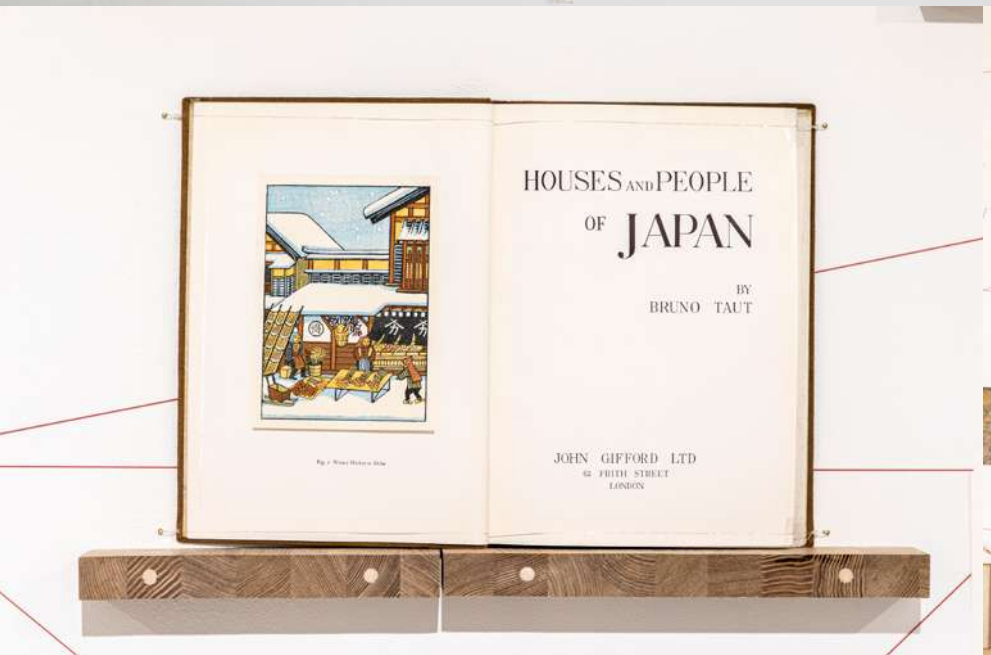
堀部 篤史（誠光社／『アウト・オブ・民藝』発行者）

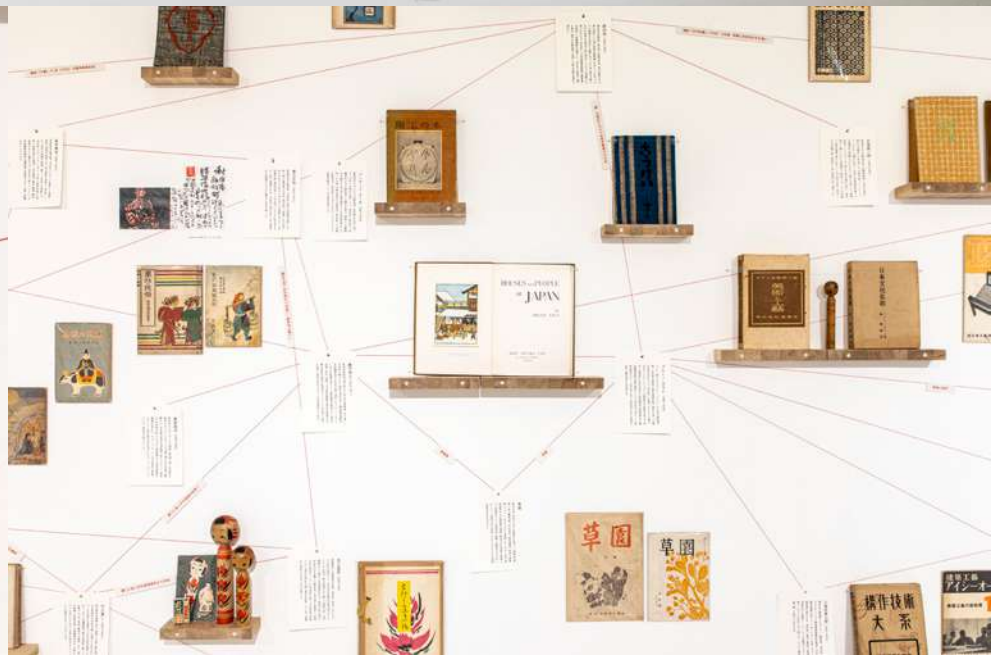
声なき者の声に耳を傾け、言葉なき者の言葉を代弁する。高名な作家による創造物ではなく、名も知れぬ人々の営みにこそ美を見出し、論理ではなく繰り返し造られることで生まれる無意識の洗練を評価する。民藝運動とは本来そのようなものだったはずではないか。しかし、提唱者である柳宗悦の声は、結果的に批評言語として大きなものとなり、運動を代表する作家たちによる論理は美を担保する言葉として崇められてしまう。その一方で、趣味のネットワークを展開し在野の知を支えた郷土玩具の愛好者や、彼らのハブのようにして存在した書店人たち、農民たちの暮らしを工芸で支えんとした運動家など、民藝運動の周縁に存在したはずの、大きな声や明確な論理を持たなかった人々は歴史の徒花として忘れ去られつつある。

「アウト・オブ・民藝」は、民藝運動をとりまくそのような「捻れ」にささやかな疑問を呈するリサーチ活動だと私は思っている。ブルーノ・タウトの著作『日本美の再発見』における北へ向かう足取りはよく知られている。しかし、秋田の案内人を請け負った地元の版画家、勝平得之の言葉はどうか。タウト側からだけではなく、勝平が残した記録をリサーチし、並列して見せることで声なき声に耳を傾け、油谷これくしょんという市井の個人が積み上げた膨大なコレクションに着目、展示しスポットを当てる。

捻れた関係ではあるが、民藝運動がとりこぼした、語られなかったものを追う「アウト・オブ・民藝」という活動自体が、ある種民藝運動が本来目指したものを現代において展開しているのではないか。彼らの活動は古い資料の行間に耳を傾け、無名に近い人々の言葉を代弁することを基本としているのだ。

タウトと勝平にまつわる相関図





タウトと勝平にまつわる相関図

ブルーノ・タウトと勝平得之が秋田で出会った1935年、1936年はさまざまな工芸運動が盛んな時期であり、両者は、民藝運動と近しい人物に接触していました。民藝運動の周縁的な工芸運動を扱った書籍や印刷物、さらに、民藝発足以前から蒐集の対象であった郷土玩具にまつわる人的なネットワークが、いかに民藝運動と関わってきたのかを相関図にしました。

相関図でとりあげた書籍や人物、工芸運動などの主なつながりを紹介します。　軸原ヨウスケ＝（軸　中村裕太＝（中

タウトのみた勝平版画

ブルーノ・タウト 著、勝平得之 版『Houses and People of Japan』 三省堂、1937年

ブルーノ・タウトの『Houses and People of Japan』（1937年）には、勝平得之の「Winter Market in Akita」という木版画が収録されている。日本の住環境を紹介した本書にしては、あまりにも風俗的な版画である。もちろん本展のモチーフであるタウトと勝平の交友によって、その版画が付けられることになったのだが、そもそもタウトはなぜ勝平の版画に惹かれたのだろうか。

『日本美の再発見』（1939年）には、タウトが秋田の石橋旅館で勝平の版画と絵葉書を見る前に、東京の版画店で見かけたことが記されている。それぞれの版画がどのようなものであったかは同定することはできていないが、おそらくタウトは、勝平の人物描写よりも建築描写に注目したのではないだろうか。だからこそ、急いで旅館に呼び寄せ、水先案内人として秋田の建築を一緒に巡り、勝平の建築眼を試したのだ。改めて本書に収められた版画をみると、勝平の作品に見られる豊かな人物描写は簡略化され、冬の市の場面を俯瞰した構図で、秋田市街の建築物に見られる軒の深い屋根が特徴的に描かれていることがわかる。タウトは勝平に、「本のなかで、我々はともに世界を巡遊しよう」（p.26参照）と手紙に記した。そして1950年には『日本の家屋と生活』として邦訳された。（中

農民美術運動と勝平得之と民藝

山本鼎 編『実用手工芸講座 男子部』第二巻　日本農民美術研究出版部、1925年

勝平得之は創作版画家として知られる以前、農民美術運動に参加していた。農民美術運動は1919年に洋画家・山本鼎が中心になってはじめた、農閑期の農民に美術教育を行い、農民により作られたものを販売する「美術」と「産業」を両立させるような運動だ。日本全国で農民美術講習会を開き、デッサンや木彫等の技術を伝授、共鳴した各地の農民たちによって農民美術生産組合が生まれ、主に生活実用品、木彫人形が作られた。

1928年、秋田県の大湯でも農民美術講習会が開かれ、勝平は彫刻家・木村五郎から木彫人形の指導を受けた。その後も木村が早逝するまで二人は深い交遊を続け、勝平の版画にも大きな影響を与えた。勝平の作った「木彫秋田風俗人形」は秋田の風俗を見事に作品化したもので秋田県を代表するおみやげにもなった。

そもそも山本は「漁夫」（1904年）という版画作品で自画・自刻・自摺により版画を表現として捉えた創作版画の父とも言える存在。勝平にとっては二重の意味でルーツとも言える人物だ。

1930年代から民藝界、郷玩界では「農民美術」への批判が高まった。柳宗悦は「民藝と農民美術」（『工藝35号』、1935年）で農民美術を批判するとともに、玩具への展望も書いた。（軸

1940年代の民藝と民俗学

（左）『月刊民藝』第二巻 第四号
日本民藝協会、1940年

（右）柳田國男、三木茂 著『雪國の民俗』
養徳社、1944年

柳宗悦による民藝も、柳田國男による民俗学も大正期に産声をあげ、農村の暮らしに目を向けてきた。とかく混合されがちなそれぞれの活動について、日本民藝館で催された座談会「民藝と民俗学の問題」（『月刊民藝』、1940年）のなかで二人は言葉を交わすことになる。司会の式場隆三郎は、噛み合わない二人の対話を解きほぐしていく。柳田は、民俗学は「過去の歴史を正確にする学問」とし、柳はそうした「経験学」としての民俗学に対して、民藝運動は、物品の価値（美しさ）を将来へと思考していく「規範学」であるとした。さらに、柳田は手工芸から機械工芸へと進んでいく状況において民藝品の将来性を柳に問いかけていく。

その後、柳は「民衆的工芸の限界」（『工芸文化』、1942年）のなかで、その限界を工人たちの社会的・経済的な弱さと指摘し、山形県の雪害調査研究などの実地的な民芸品の開発へと進んでいく。ちなみにブルーノ・タウトは「げてものかはいからか」（『アトリエ』、1936年）のなかで、そうした柳の「げてもの（手工芸）」の魅力を認めつつも、「はいから（機械工芸）」の視点が欠けていることをいち早く指摘している。他方で、柳田は『雪國の民俗』（1944年）を刊行する。そのなかに掲載された勝平の版画を眺めてみると衣服や民具などを丹念に描写し、民俗学的な視点からも農村の暮らしぶりをとらえていたことがよく分かる。（中

『草園』と勝平とタウト

（左）『草園』昭和二十四年一月発行号、草園社、1949年　（右）『草園』昭和二十七年一月発行号、草園社、1952年

『草園』（後に『叢園』）は1935年に秋田で創刊された随筆誌。初期の同人に石田玲水、豊澤武、近藤兵雄、相場信太郎、勝平得之、中島耕一らがいた。1936年からは勝平がほとんど全ての表紙を版画作品で飾った。内容は美術、文学、音楽、詩歌、民俗学など幅広く、武者小路実篤、柳田國男ら著名な外部執筆者も多数寄稿した。

また草園社として戦後は美術展なども開催、秋田の文化を牽引した。著作『雪橇』（同人・中島耕一と勝平の共著）や、『花の歳時記』『秋田歳時記』（ともに同人・相場信太郎と勝平の共著）など様々な書物も生まれた。勝平の民俗学的な視座、美術的教養は、草園社に集った仲間との交友から多く生まれていると自他ともに認めている。

『日本美の再発見』（1939年）にも書かれているが、タウトは勝平と金足村の奈良家訪問の前後に同人・近藤兵雄宅に立ち寄っている。近藤はタウトに『草園』への寄稿を依頼し、後日『草園』10号（1936年）に「追分の印象」と題したエッセイが上野伊三郎の訳で掲載された。

分野を超えて同人が「仲良く」交流したことが『草園』50年誌、百号特集を読んでいると伝わってくる。この異ジャンルの交流には秋田の文化の深さと豊かさが見える。ゆとりを失った現代社会に生きる我々は『草園』から学ぶことが大いにあるだろう。（軸

タウトデザインの継承

上野伊三郎他 著
『群馬工芸』
群馬県工芸所、
1938 年

「建築家の休日」と自嘲したタウトの日本での仕事は、執筆活動と工芸制作に注がれた。特に群馬県工業試験場高崎分場（後の群馬県工芸所）での工芸品のデザイン活動を中心に、1935 年には、東京・銀座で工芸品店「ミラテス」を開き、高崎での工芸運動を本格化させた。タウトの生み出した工芸品の特質は『タウト全集第三巻 美術と工芸』（1943 年）に詳しいが、手工による仕事（げてもの）と機械による仕事（はいから）のあいだぐらいが、落しどころだと考えていたようである。タウトが日本を去ったあと、『群馬工芸』（1938 年）を刊行した群馬工芸所の所長・上野伊三郎らによってその工藝運動は継続されたが、戦中期に入っていくなかでその活動は終息していった。

　ではタウトのデザインはどのように引き継がれていったのだろうか。その一端を今和次郎の仕事に垣間見ることができる。タウトと今は、浅草でビールを飲み交わして装飾について語り合ったというが、その出会いはその後の今の仕事を進展させていく。『民俗と建築 平民工芸論』（1927 年）に記された農村の工作物のスケッチに見られる目線は、関東大震災以降の都市生活の考現学を経て、1940 年代には、より実地的な農村の生活改良へと進んでいく。特に、山形県の雪害調査研究では、タウトデザインにも見られる科学的な検証に基づく日本の生活環境に即した建築設計が実践されているのである。（中

『版芸術』と郷土玩具

（左）料治熊太 編『版芸術』九月号、白と黒社、1935年　（右）料治熊太 編『版芸術』十一月号、白と黒社、1933年

『版芸術』は料治熊太が自身の出版社・白と黒社から 1932 年に創刊した版画雑誌。前身の『白と黒』が手摺りで部数が少ないこともあり、当時できた印刷技術「機械摺木版」で量産し、雑誌を通して創作版画の普及を目指した。1933 年 9 月号「全国郷土玩具版画集」を皮切りに、郷土玩具色を強め、郷土玩具と創作版画の相性の良さを打ち出した。

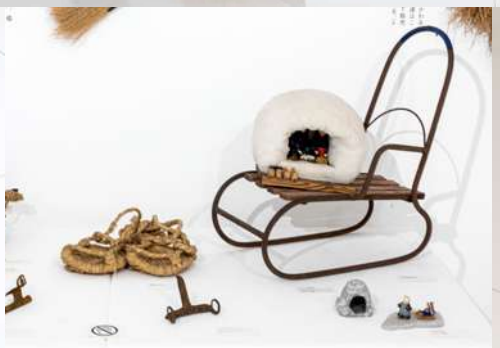
　ちなみに『白と黒』時代からの仲間は民藝運動合流以前の棟方志功、谷中安規、川上澄生、川西英、平塚運一など錚々たる顔ぶれ。年賀状を創作版画で、という年末特集も創刊時から終刊号（1936 年）まで続いた。ちなみに料治熊太自身も創作版画を志し、料治朝鳴名義で多数の版画や、それだけではなく創世玩具も作った。

　1934 年 12 月号「雪国の風俗」では勝平得之の版画を特集したり、他の号でも何度も勝平の版画が掲載されている。秋田にいながら東京の出版物で掲載されていく当時のネットワークが興味深い。

　もともとは編集者としてキャリアをスタートし、出版社を作りながら作家でもある…という複数の顔を持つ料治熊太は、後年は骨董・古美術研究で有名となる。関係者にも郷土玩具、創世玩具、農民美術、民藝関係者が入り乱れて、創作版画というアウトプットの裾野の広さをうかがい知ることができる。（軸

タウトの秋田への旅

1936
高崎
2月1日(火)
秋田
2月10日(月)
秋田
2月9日(日)
秋田
2月8日(土)
大曲
秋田
大曲
六郷
2月7日(金)
秋田
横手
2月6日(木)
高崎
秋田
追分
金足村字小泉
追分
秋田



1935
タウトの秋田への旅
5月24日(金)
秋田
5月25日(土)
秋田
旭川村字湯沢岱
秋田
5月26日(日)
秋田
追分
金足村字小泉

タウトの秋田への旅

ブルーノ・タウトが秋田での滞在を記した『日本美の再発見』（1939年）と勝平得之が残した原稿「秋田に於けるタウトさん」を時系列に沿って並べ、当時の新聞記事や書簡などを合わせることで「タウトの秋田への旅」を追想することができます。さらに、タウトの著書のなかで登場する秋田の民具（雪橇、農具、衣服など）を、油谷満夫さんが収集してきた戦前の秋田の膨大な民具コレクションの中から選び展示しました。

『日本美の再発見』と「秋田に於けるタウトさん」のタイムライン

（左）勝平得之「秋田に於けるタウトさん」原稿（複写）（秋田市立赤れんが郷土館蔵）
（右）ブルーノ・タウト 著、篠田英雄 訳『日本美の再発見』岩波書店、1939年

「秋田に於けるタウトさん」 原稿

『生誕110年記念出版 勝平得之の軌跡 第1集』、勝平得之ファンクラブ、2014年

勝平得之がタウトの思い出を綴ったエッセイ。没後、遺品の中から清書された原稿が発見された。生前の掲載誌は不明だが、『生誕 110 年記念出版 勝平得之の軌跡 第 1 集』（勝平得之ファンクラブ発行、2014 年）に掲載された。

勝平得之　かつひら・とくし
[1904-1971]

秋田市鉄砲町 (現大町 6 丁目) 生まれ。竹久夢二の作品に魅了され、美術の道を志す。農民美術運動の木彫講習会での木村五郎、来秋したブルーノ・タウトに大きな影響を受けた。色刷版画を研究し、独学で自画、自刻、自摺による彩色版画の技法を習得する。 郷土秋田の自然や風俗をテーマにした作品を一貫して制作。秋田を訪れたタウトの水先案内人となる。

『日本美の再発見』

ブルーノ・タウト著、篠田英雄訳、岩波書店、1939年

桂離宮をはじめ，伊勢神宮，飛騨白川の農家および秋田の民家などの美は，ドイツの建築家タウトによって「再発見」された。彼は，ナチスを逃れて滞在した日本で，はからずもそれらの日本建築に「最大の単純の中の最大の芸術」の典型を見いだしたのであった。日本建築に接して驚嘆し，それを通して日本文化の深奥に遊んだ魂の記録。

Bruno Taut　ブルーノ・タウト
[1880-1938]

ドイツ・東プロイセンケーニヒスベルク生まれ。第一次世界大戦後は、都市復興計画に関わり多くの集合住宅を手がけた。台頭するナチスを避け、1933 年に日本インターナショナル建築会の招聘を受けて来日する。宮城県仙台市の国立工芸指導所や群馬県の工業試験場高崎分場の嘱託として工芸品のデザインと技術指導を行う。1935 年 5 月と 1936 年 2 月に秋田を訪れる。

1935

『日本美の再発見』

ブルーノ・タウト著、篠田英雄 訳『日本美の再発見』岩波書店、1939年より引用

廊下には秋田の郷土画家勝平得之氏の版画と絵葉書（木版）とがならべてあった。同氏の作品は東京の版画堂平居氏の店にも陳列してある。そこで上野君は、ひとつ勝平氏に秋田の案内を頼んでみようという妙案を思いついた。

秋田市は、全体として今なおすぐれた伝統的文化を保持している。なるほどヨーロッパ風のハイカラ文化もある、しかしそれとてもきわめて控え目である。正真正銘のハイカラ精神は、ここには今のところまだ深く沁みこんでいない。それだからいわゆる「モダン」建築なるものも余り多く見かけなかった。これは秋田にとって仕合わせなことだ。

この地方に特有の真鍮細工は、陳列館にはひとつもなかったが、街の商店で見ることができた。とくに囲炉裏の上に釣下げて鉄瓶を吊っておく「自在」は、美しい形をしていた。

「秋田に於けるタウトさん」

勝平得之 著「秋田に於けるタウトさん」『生誕110年記念出版 勝平得之の軌跡 第1集』、勝平得之ファンクラブ 2014年 より引用

5月24日(金) 秋田

石橋旅館の使いの者があの手紙を持って来たのは、昭和10年5月24日の夕方であったろうか、私はその状袋の裏を見てしばらく考えこんだ。

ブルーノ・タウト、上野伊三郎、と並べて署名してあったが、ふ二人とも私には全然未知の方々であったからである。

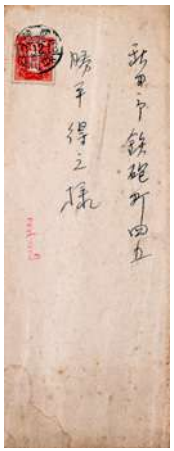
5月25日(土) 秋田

橋を渡って外町の商店街に入った。呉服屋、味噌醤油屋。荒物店、質屋などの老舗を案内して、通町の酒屋や野菜市場のあたりの店々の家並みに来ると、タウトさんは「すばらしいです」、とふぼつかない日本語を言いながら熱心に見られるのであった。そして近頃の建物洋館などは、たいてい「はいから」とか「いかもの」とか言って、その前を素通りした。

旭川村 字湯沢岱

勝平氏の質素な住居を訪れて、すぐれた創作版画を見せて貰った。同氏は、この方面に新しい日本的な型を見出そうとして、木版画に精神を傾注していられる。この画家の温かい眼は人間の上に、—それもとくに農民と子供の上に向けられている。私は自著の巻頭を飾るために一葉の版画を乞いうけた。

もっと故郷を偲ばせるのは、森に囲まれた湖と藁葺屋根の農家のある湖畔の村とである。もし湖の背後に聳える青い山と水田に働く農民、それから湖中で独木舟を操る若者とがなかったら、この幻想は間然するところがないだろう。実際、この砂地はまさに故郷のものである。



ブルーノ・タウトから勝平得之への手紙（複写）
（秋田市立赤れんが郷土館蔵）

5月26日(日) 秋田

それからタウトさん、上野氏は、私の家に立ち寄って創作版画を見られた。数あるなかからタウトさんは雪景の版画が好きらしいので、雪国の風俗版画集を呈上した。そして冬の生活や農村の正月の行事などの話をしたが、ことのほか冬の秋田に興味をもたれた。その節、タウトさんは著書の口絵に、私の創作版画を入れたい旨を話されたのであった。

追分 秋田

この日の午後、私達は追分駅でふ別れした。タウトさんと上野氏は、青森へ視察に行かれたのである。この別れ間際に、タウトさんは手帳のメモを見ながら言った…。「新しい友達、勝平さん、さようなら」骨ぼったい手が突然、私の手を握りしめた。これが私の知っているタウトさんの一番長い日本語であった。

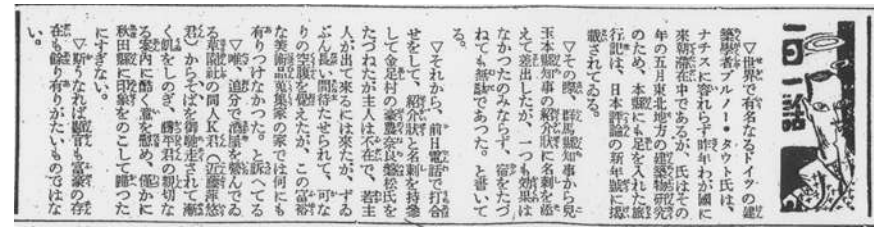
金足村 字小泉 追分

1936

2月6日(木) 高崎

それからは、東京、京都、群馬から、タウトさんの原訳二葉入りの手紙を頻繁にいただいた。そして口絵版画の構図もできて版刻した。二千枚の手刷版画は、私のからだには重すぎる労働であったが、二ヶ月余りで完成して出版元へ送った。タウトさんからは、「木版口絵は大変よく出来た、色の調子もすてきです」、との手紙をいただいて、ほっとした。

昭和11年1月上旬、京都の上野氏から、タウトさんの訳文の入った手紙をいただいた。「秋田で貴兄の絵にあるような子供の遊びなどは、何日頃みられるのか知らせてほしい」、との照合であったので、「旧正月の行事頃見られる」、と返信すると、折返し手紙をいただいた。それは、「上野氏とともにその頃秋田へ参ります」、との文面であった。



▽世界で有名なるドイツの建築學者ブルノー・タウト氏は、ナチスに追われて目下わが國に來朝滯在中であるが、氏はその年の五月東北地方の建築物研究のため、本縣にも足を入れた旅行記は、日本評論の新年號に掲載されてゐる。

▽その際、群馬縣知事から見玉本縣知事の紹介狀に名刺を添えて差出したが、一つも効果はなかつたのみならず、宿をたづねても無駄であつた。と書いてゐる。

▽それから、前日電話で打合せをして、紹介狀と名刺を持參して金足村の豪農奈良松氏をたづねたが主人は不在で、若主人が出て來るには來たが、ずゐぶん長い間待たせられて、可なりの空腹を感えたが、この富裕な美術品蒐集家の家では何にも有りつけなかつた。と訴へてゐる。

▽時、遠分で酒屋を營んでゐる某閣紙の同人K君（近藤某氏君）からそばを御馳走されて海苔をしのぎ、勝平君の親切なる案内に酷く意を感め、僅かに秋田縣に印象をのこして離つたにすぎない。

▽斯うなれば縣官も當縣の存在も餘り有りがたいものではない。

「きのふの本縣における世界的建築學者ブルノー・タウト氏の見玉知事に對する印象について知事の談話は斯うである。

▽その日は、丁度町田商相のお國入りの日で、朝早くから官邸を出て、各所を案内に歩いてゐたので、ブルノー、タウト氏の來訪はちつとも知らなかつた。

▽後で、そのことを知つて恐縮してゐる。斯うした世界的大學者の本縣入りを知つてゐたら自分は許嫁は少しばかり延ばせるし、先頭に立つて縣内を案内もし、色々とおたづねもしたかつたが全く殘念である。

▽近く日本評論社を通して、當時の事情を書いてお話しやうと思つてゐる。とは見玉知事の談話である。

上／『秋田魁新報』
1936年1月9日朝刊1面

下／『秋田魁新報』
1936年1月10日朝刊1面

2月7日(金) 秋田

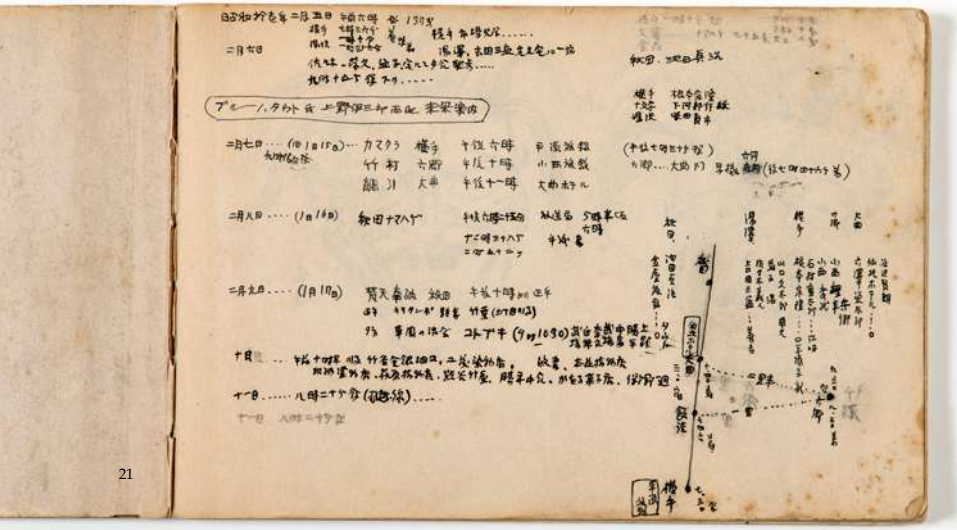
駅前には人力車（箱橇）がいくつもならんでいた。市街にはうず高く降り積った雪、明澄な大気。

この地方に特有なキモノを着た美しい婦人達（花をつけた杏の枝を手にしている若い婦人に出会ったが素朴、新鮮で限りなく美しかった）。ややシベリアの婦人を連想させる。男子の服装は、まったくロシア風で、まるきり日本らしくない。

箱馬車に似た橇を見かけたが、彩色してあって、綺麗な玩具そっくりだった。（…）モンペをつけた（女達は例外なく穿いている）格好は熊そっくりだ。子供達もみんなモンペ姿である。

秋田 横手

ブルーノ・タウトが秋田滞在時の勝平得之のメモ（複写）
（秋田市立赤れんが郷土館蔵）



2月7日(金)
横手

市（いち）がたっていた。市は方々の町でかわるがわる毎日のように催され、農民達はここへめいめいの品物を持ってきて販売し、また別の品を買って帰るのである。

新聞記者が三人インタヴューにやってきた。写真を撮るというので、疲れていたけれどもう一遍外へ出た。

（二）　昭和十一年二月九日

建築界の権威
ブルノー教授 雪の秋田を視察
絣の着物はよいが 洋服は困りものですネ―と

世界的な建築家がブルノー氏にとつて秋田の風土教授で二年前から害が國に潜伏中のブルノ・タウト氏が七日午後秋田駅に着いたフランゼである、だ「私は鼓舞」の様子を語られた、昨年五月警視庁から秋田駅知事宛の紹介状に名刺を添へて差出したが一つも嫌味がなかつた」と某紳士に発表した旅行記「奥の細道」で見た玉川の「蛇の目」の「大地主」の「絣」の着物はよいが洋服は困りものですネ―と

ブルーノ・タウト（右）と勝平得之（左）

『秋田魁新報』
1936年2月9日夕刊3面

六郷

それからカマクラを見に町へ出た。すばらしい美しさだ。これほど美しいものを私は曾つて見たこともなければ、また予期もしていなかった。これは今度の旅行の冠冕だ。この見事なカマクラ、子供達のこの雪室は！

カマクラのなかにしつらえた雪龕には水神様を祀り（この辺はいったいに水に乏しいのだ）、蝋燭をともし、お供物がそなえてある。（…）子供達は世にも真面目な物腰で甘酒を一杯すめてくれるのである。こんな時には、大人はこの子達に一銭与えることになっている。ここにも美しい日本がある、（…）

馬橇はがたぴし走り出すのであるが、橇にはもう以前のように鈴がついていない。その代り馭者が、豆腐屋のもっているようなラッパを吹くのである。

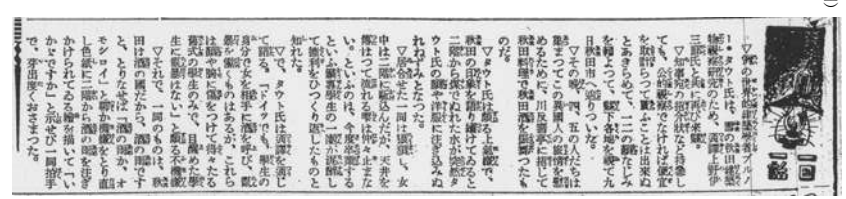
私たちが近づくと、子供たちは「お水神さんを拝んでたんせ」、と参詣をうながして、お神酒や熱い甘酒をご馳走するのであった。折から十五夜のお月さまが蒼白い光を輝かせて、雪がいよいよ冷たいなかで、雪壁を照らす桃色の照明を囲んでいるカマクラの子供たちは、暖かそうに団らんするのであった。お神酒と甘酒をいただいたタウトさんは「すばらしいです」、と驚嘆の声をたてながら、大きな体をこごめて、つぎつぎとカマクラの中を覗き見るのであった。

冴えかかる夜の空気に思い出したように馭者（ぎょしゃ）はラッパを吹く。馬橇は烈しく上下にゆれて走る。（…）わずかばかりの酒に頬を赤らめたタウトさんは、故郷の馭者が馬を走らす鞭さばきを、手真似しながら、舌を打ち鳴らして語るのであった。

竹の裂片は高い櫓の上にいる私達のところまで飛んできた。打合いは、まるで本物の戦いのような印象だ、もちろん人間同士の打合いではなくて、お互に竹竿を叩き合うのである。（…）おそらくこの行事は、何もすることのない冬じゅう、遣り場に困った精力の捌け口を求めるために考案された戦さごっこなのであろう。

（…）綱引きの人達は「ハイサ、ハイサ」の掛声にいよいよ興奮するばかりだから、なんとしても危険である。綱引は一進一退しながら続けられ、遂に綱が引き切られるのである。正月のこととて、酒が身体のなかに沢山入っているのだから、秩序も何もあったものでない。

2月7日(金) 大曲



『秋田魁新報』
1936(昭和11)年2月11日夕刊1面

「酒の雨」ブルーノ・タウト画
2月9日夜、懇親会の際に、二階でドンチャン騒ぎの学生らの宴席から突如酒の雨が降りかかり、タウト氏を濡らしてしまった。心中甚だ不快だったらしいが「酒の雨」を描いてわずかに機嫌を直した、と新聞に掲載される。

『秋田魁新報』
1936(昭和11)年2月14日夕刊4面

秋田

秋田銘菓「諸越」と似たドイツの菓子マルチパンを描いた色紙
（秋田菓子宗家かおる堂蔵）

秋田銘菓の諸越（もろこし）工場（かおる堂）を見学したブルーノ・タウトは、故郷のドイツにも似たような菓子マルチパンがあるのを思い出し、色紙にマルチパンの絵を描いて、かおる堂へ贈った。

金谷旅館では、勝平氏や上野君と絵の寄せ描きをして諸方へ手紙代りに出す。

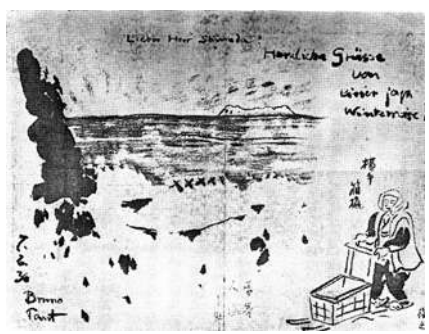
神社の付近では、玩具の「ボンデン」を売っていた。彩色した短い棒で、形は諸方の村々からこの神社へ奉納する本物の「ボンデン」と同じである（男根のシンボルだろうか）。（…）神社には色とりどりの布で飾られた大きな「ボンデン」が、もういくつも奉納された。

赤ん坊は、家の中では大きな籠の中に入れて、まわりにいろんな保温物を詰めこんでおくのである。

2月8日(土) 秋田

2月9日(日) 秋田

金谷旅館の2階では、タウトさんの持参した香り高いコーヒーを飲みながら、晩までゆっくりくつろいだ。タウトさんはまた、知人に寄せ書きの手紙を書かれたので、私たちも思い思いのものを書いて興をそえた。



ブルーノ・タウト、上野伊三郎、勝平得之の寄せ書き（1935年）
（『叢園』勝平得之追悼号、1971年、P26より）

その夜のタウトさんは、少林山の図や櫓の図などの色紙を書かれたが、上野氏はこれに訳文をなされた。私たちも興にのって色紙を書いて分け合った。

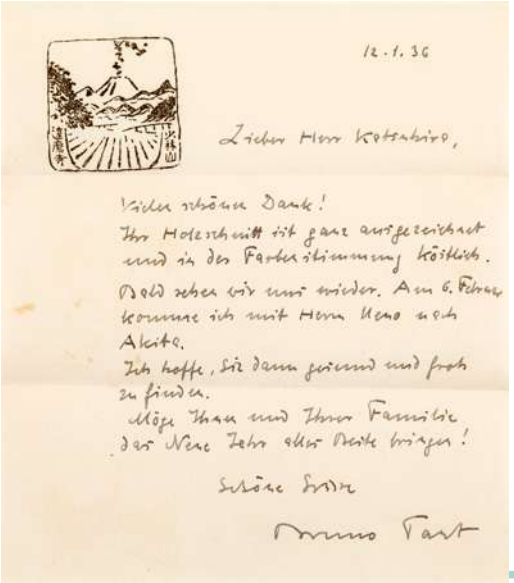
2月10日(月) 秋田

私達を乗せた列車は、連続した二つのループを、越後の側から登っている。これを越えて上州側へ下ると、私の冬の旅も終りを告げ、間もなく少林山へ帰ることができる。列車はもうくだりかけたらしい。

2月11日(火) 秋田

2月11日朝、秋田駅でタウトさん、上野氏とお別れした。駅には、魁新報社の武塙三山氏がみえられた。同氏が「秋田の感想は」、とただすと「秋田の文化は建築と酒と食べものと版画である。」と、タウトさんは車窓から言われたのであった。思えばあれが、最後のお別れだった。

私はあれ以来、タウトさんにはお会いしていない。その後、三省堂からタウトさんの著書が届けられたが、その時にはもうタウトさんは日本を離れてトルコに行かれたあとだった。そして最後の手紙にはこう書かれてあった。「三省堂発行の『日本の家屋と生活』の本のなかで、我々はともに世界を巡遊しよう」、と。私はいつでもこの文面を思い出しながら、今でもあの旅人タウトさんの姿を身近に感ずるのである。


12.1.36

Lieber Herr Kotsubiro,

Vielen schönen Dank!
Ihr Holzschnitt ist ganz ausgezeichnet und in der Farbenstimmung köstlich.
Bald sehen wir uns wieder. Am 6. Februar kommne ich mit Herrn Ueno nach Akita.
Ich hoffe, Sie dann gesund und froh zu finden.
Möge Ihnen und Ihrer Familie das Neue Jahr alles Beste bringen!

Schöne Grüße

Bruno Taut

ブルーノ・タウトから勝平得之への手紙（複写）
（秋田市立赤れんが郷土館蔵）

展覧会解説

アウト・オブ・民藝とは

中村：アウト・オブ・民藝は、民藝運動の周辺にいた人物やネットワークをみていくと面白いよねというところから始まっています。

軸原：僕は民藝運動から外れたもの、郷土玩具やこけしといった趣味的なものを調べていて、中村くんは戦前の工芸運動や民藝運動から離れていった人物を調べていました。たまに二人で会って、雑談したり、資料を見せあったりしています。

中村：そもそも民藝運動は何かというと、宗教哲学を研究していた柳宗悦が、お土産にもらった李朝の白磁の壺を見たことから始まると言われています。柳はその壺にみられるような無名の職人が土地の素材と技術を駆使して作った工芸品を朝鮮や日本で蒐集しました。1926年に「日本民藝美術館設立趣意書」を出し、1936年に建てられた民藝館を中心にその活動を広げていきます。そうした民藝の周辺にいた人物やネットワークを「相関図」を通してみていくことをしてみたかった。そして、今回は秋田雪嶺編と題して、ブルーノ・タウトと勝平得之に注目しています。

軸原：面白いのは、タウトは中村くんの興味がある戦前の工芸運動に深く関わっているし、勝平は創作版画や農民美術といった趣味のネットワークのなかで活躍しています。そうした僕たちの関心をもとに、彼らにまつわる相関図を作成しました。

タウトと勝平にまつわる相関図

中村：タウトはドイツを代表する建築家であり、1933年に日本にやってきます。タウトは日本での建築の仕事にはあまり恵まれず、その代わり多くの文章を書きました。今回も取り上げている『日本美の再発見』の桂離宮と日光東照宮の比較から日本的な建築空間の特質を指摘したことは有名ですね。

軸原：勝平は秋田の郷土の版画家。創作版画に見られる自画・自刻・自摺を秋田で実践していた人物でもあります。タウトの書籍には、勝平の版画が付いています。

中村：相関図では、人物同士を赤い糸でつないでいくことで、その関係性を表しています。たとえばタウトと上野伊三郎は「タウトを日本に招聘」秋田に同行」と記されています。上野はタウトを日本に呼び寄せた人物で、通訳としてタウトの旅に同行しました。群馬県の高崎で工芸品のデザインも行っていました。

軸原：勝平は山本鼎とつながります。山本は農民美術運動という農閑期の農民の副業として「木っ端人形」の制作を提案しています。勝平も木村五郎に指導を受け、その運動に参加していました。さらに、山本の関係をみていくと農民美術運動の批判を行った柳とも様々なかたちでつながります。

中村：そうした関係性の糸を追いながら、壁面を行き来していくと、より立体的にそれぞれの相関関係をみていくことができます。

タウトの秋田への旅

軸原：タウトの『日本美の再発見』には、秋田の旅の道程が日付入りで記されています。さらに勝平の「秋田に於けるタウトさん」というテキストと合わせてタイムラインを見ていく構成になっています。

中村：たとえば、1935年の秋にタウトは上野と秋田にやってきます。石橋旅館で勝平の版画をみて、水先案内人として勝平を呼ぶことを考えます。

軸原：一方でその知らせを受けた勝平は、タウトも上野も知らなかった。それが二人の出会いです。

中村：民具は「油谷これくしょん」からお借りしています。テキストの中で登場する当時の民具をなるべく関連するように配置しています。

軸原：秋田でのタウトの様子をとらえた魁新報の新聞記事も展示しています。

中村：タウトはカマクラにも感動していますね。雪による建造物という点もさることながら、子供たちが甘酒を振る舞う光景に感動したのでしょう。

軸原：勝平は、トルコに旅立ったタウトから宛てられた手紙に「本のなかで我々はともに世界を巡遊しよう」と書かれたことを嬉しそうに記しています。

中村：本を読むという経験を「相関図」と「タイムライン」で立体的に構成しました。この展示を通じて、二人の旅を追体験してもらえればと思います。

（会場で上映した展覧会解説より抜粋／一部加筆）

秋田雪橇編 イベントレポート

オープニングトーク 2020.1.18

秋田公立美術大学ギャラリー BIYONG POINT（ビヨンポイント）で1月18日、書籍『アウト・オブ・民藝』（2019年）の版元である誠光社（京都市）の堀部篤史氏を迎えてオープニングトークを開催しました。

ブルーノ・タウト著『日本美の再発見』を読みながら秋田に来たという堀部氏より、「アウト・オブ・民藝」というリサーチ活動の成り立ちを解説。堀部氏は「民藝の中心にはいなかった人々を愛情を持って拾い上げ、相関図によって提示したことに共感した人が多かったと思う。民藝というキーワードが広がりを見せたのを実感した」と振り返りました。

また、「古い文献を収集する中で個々の書籍からは読み解けなかった新しい発見や、一般的に語られていないような繋がりを見出すことは非常に面白い。戦前の本屋や出版社やお店という存在が、民藝運動やその周辺の人脈図に大きな役割を果たしている。私自身も、現在本屋でありながら個人的なネットワークを使って出版活動したりするのは、ある種その当時に戻っているような感じがして、いろんなことに重ね合わせて非常に面白いと感じている」と、この活動の魅力について話しました。

堀部篤史

後半の軸原と中村、案内人・宇野澤による「なかよしトーク」では、2018年に京都で開催したトークやそれぞれの関心事、本展の成り立ちについての解説をおこないました。そして2019年9月に行った秋田でのリサーチについて画像や映像で紹介しながら、時折、軸原・中村の問いに会場が答える展開となりました。

オープン翌日19日には、油谷氏が収集した民具や生活用品の約20万点を収蔵する「油谷これくしょん」（秋田市）にて、ご本人による解説ツアーを開催。『日本美の再発見』にも登場する、雪橇や農具をはじめとした1935-36年頃の秋田の風俗をあらわす数々の資料が展示されており、当時の秋田の生活様式や町の様子などのお話も交えながら、油谷氏が収集した展示品についての解説をおこないました。

油谷満夫

宇野澤昌樹

軸原ヨウスケ（左）と中村裕太（右）

2020.1.19 油谷これくしょんツアー

「油谷これくしょん」
油谷満夫氏が古い生活用品など60年以上かけて集めた約50万点にもおよぶコレクションの中から、明治～昭和時代の民具等約20万点が秋田市に寄贈され、旧金足東小学校に展示・収蔵されている。

・住所｜〒010-0123
秋田県秋田市金足片田字待入109
TEL｜018-893-4981
・見学時間｜午前10時から午後4時まで
（入館は午後3時30分まで）
・見学料金｜無料
・休館日｜月曜日・火曜日（月曜日及び火曜日が祝日の場合は開館）、年末年始、特別整理期間（不定期）

油谷満夫さんインタビュー

「アウト・オブ・民藝」の展示はどうでしたか？

私は「民藝」と「民具」の区分ははっきりできない。違うものもあるけど、重なるものもあるでしょう。でも「民藝」や「民具」は、名もない人が作ったものがいっぱいある。なんだか私が集めてきたものと重なるな、と思いました。

油谷さんは民具などさまざまなものを60年以上もの間集めてきたわけですが、どのようなことを考えてコレクションを続けてきたのでしょうか。

ものを通して心を磨くということですね。今の人はそういうことを忘れてしまっている。手づくりのものが少ないでしょ。土地の人がその土地の材料を使って作るものに多くのお金を払わないからね。

（今は所属していませんが）かつては秋田県の民藝協会に入っていました。このときに作り手の人たちをずいぶん訪ねてまわりました。作り手から学んだことは大きいですね。できたものの形だけじゃなくて、どんなところでどうやって作っているのか見るとわかってくることがある。家族で協力して作っている様子なんかを見ると大変そうだけど「いいな」と思うよね。キラキラしたものがいいのではないんだよね。山から材料を採ってきて作ったもののよさがあるでしょう？素朴だけど、工夫がある。

油谷さんはブルーノ・タウトと勝平得之のことをどう見ているのでしょうか。

ブルーノ・タウトは秋田のことをほめているけど、勝平さんが特別によかったんですよ。勝平さんが秋田のいいところを丁寧に案内したんだと思います。秋田の人がみんないい人のわけない。勝平さんが特別にいい人だったの。

私の兄が家を建てたときに、お祝いとして兄にあげるために勝平さんの版画を買ったんですよ。5万円かな。私にとっては大変な金額だった。貧乏だったから。勝平さんに5万円を持って行ったら、奥さんを呼んですぐに渡してました。奥さんへの愛情を感じた。こういう夫婦ってすばらしいなと思った。秋田で版画家として暮らすのは経済的には苦労したでしょうけれど、人間として立派な人でしたね。

ABURAYA COLLECTION

油谷さんのコレクションの基準、収集する上で大切にしていることを教えてください。

なんでもかんでも、そこでいらないものをもらう、ということだよ。みんなに不思議がられた。もう誰も使わないようなものを欲しがるから。集めるのには苦労しました。農家が家を建てかえするでしょ。農機具も家財道具も、もう使わないんだけど、捨てられない。大切に使っていたものだと思うよ。生活を支えてきたものだからさ。じっと見ていたら「これ、もってけ」と言ってくれたりね。

「民衆的工藝」における「民衆」は当時（1935.36年）と今日でどのように変わったと思いますか？

それは大きく変わってますよ。今は直接生産する人と消費する人、働く場所の違いがハッキリしている。昔は「民衆」といったら農家だった。勤めている人もいたけど、それほど多くなかったからね。

農地解放で農家の暮らしが変わった。今は農家が農家の暮らしを知らないもの。

私は高校は1年で中退したし勉強もできなかったから、ものを集めるようになってからは調べものをするのによく辞書を引きました。あるとき「民具」の「民」という字を調べると、「民」という字は「奴隷の目に針を刺して目が見えないようにした姿」を示しているというので驚いたんだよ。民衆というのは、支配者に目をつぶされる人たち、虐げられた人たちということだ。「民藝」も「民具」も庶民のものだということだよね。

タウトさんが秋田に来たころの暮らしは農地解放までそれほど変わってないと思う。季節の労働があって、みんな慎ましく生活していました。今の暮らしとは全然違う。もうわからなくなっているよね。でも、ものが語りかけてくることがある。こんな暮らしがあったということを知ってもらいたいです。

2020年3月10日　取材：宇野澤昌樹

油谷満夫（あぶらや・みちお）［1934ー］

秋田県横手市生まれ。昭和25年から民具の収集を始め、生活用品を含めたコレクションは50万点を超える。そのうち20万点は秋田市に寄付し、「油谷これくしょん」に展示されている他、秋田市の情報発信などで活用されている。

ABURAYA COLLECTION

PROFILE

軸原ヨウスケ（旅人）

岡山県を拠点に活動するデザインユニット「COCHAE（コチャエ）」のメンバーでデザイナー。「遊びのデザイン」をテーマに、新しい視点を持った玩具の開発、出版企画や商品開発など幅広く活動中。
http//www.cochae.com/

中村 裕太（旅人）

美術家。京都精華大学特任講師。「民俗と建築にまつわる工芸」という視点から陶磁器、タイルなどの学術研究と作品制作を行う。近年の展示に「表現の生態系」（アーツ前橋、2019）など。
http//nakamurayuta.jp

宇野澤 昌樹（案内人）

東京造形大学卒業後、出版社で働きながらアーティストと関わり、展覧会のサポートや上映会の企画などを行う。その後も、土地や地域・場所と結びついた表現や、芸術以前の創造行為、芸術の起源を想起するような表現に注目し活動中。

堀部 篤史（版元）

学生時代より恵文社一乗寺店でアルバイトを始め、2015年8月まで同店店長を務める。独立後、本屋の新しいあり方を提案・実験する「誠光社」を立ち上げ、店舗運営、イベント企画、出版などを手がける。
https://www.seikosha-books.com

展覧会概要
「アウト・オブ・民藝 | 秋田雪橇編 タウトと勝平」
会期 | 2020年1月18日（土）– 5月10日（日） 9時– 18時
会場 | 秋田公立美術大学ギャラリーBIYONG POINT（ビヨンポイント）
（秋田市八橋南1-1-3 CNA秋田ケーブルテレビ社屋内）
入場無料
企画 | 宇野澤 昌樹、軸原 ヨウスケ、中村 裕太
デザイン | 軸原 ヨウスケ
会場構成 | 中村 裕太
映像撮影編集 | 須賀 亮平
設営協力 | 國政 サトシ
コーディネーター | 岩根 裕子、石山 律（NPO法人アーツセンターあきた）
主催 | 秋田公立美術大学、NPO法人アーツセンターあきた
協力 | 秋田市立赤れんが郷土館、油谷これくしょん、
秋田葉子宗家かおる堂、秋田魁新報社、誠光社、CNA秋田ケーブルテレビ

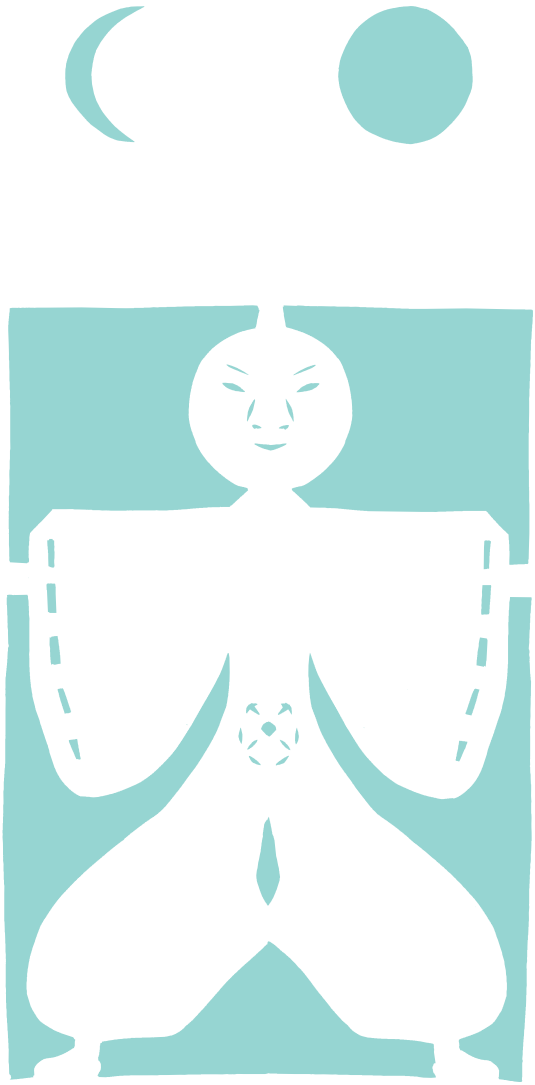
オープニングトーク
日時 | 2020年1月18日（土）16時– 18時
会場 | BIYONG POINT
登壇者 | 堀部 篤史（誠光社）、宇野澤 昌樹、
軸原 ヨウスケ、中村 裕太

油谷これくしょんツアー
日時 | 2020年1月19日（日）13時– 15時
会場 | 油谷これくしょん

『秋田魁新報』
1936年2月9日 夕刊3面より

小冊子+タウトと勝平にまつわる相関図（付録）
「アウト・オブ・民藝 | 秋田雪橇編 タウトと勝平」
2020年4月20日 発行

編集 | 宇野澤 昌樹、軸原 ヨウスケ、中村 裕太、岩根 裕子
デザイン | 軸原 ヨウスケ
写真 | 草彌 裕（会場）、森田 明日香（イベント）
発行 | 秋田公立美術大学、NPO法人アーツセンターあきた
〒010-1632　秋田市新屋大川町12-3
秋田公立美術大学 アトリエももさだ内（NPO法人アーツセンターあきた）
Tel 018-888-8137　E-mail info@artscenter-akita.jp
www.artscenter-akita.jp



アウト・オブ・民藝　秋田雪㷍編
タウトと勝平　1935 1936
タウトと勝平に まつわる相関図

交流の関係
出版などの関係
対話や批判の関係

柳、雑誌『工藝』51号（1935）「民藝と農民美術」で農民美術批判

雑誌『月刊民藝』（1940）で対談　民藝と民俗学のすれ違い。司会は式場隆三郎

平塚、農民美術運動に参加

木村、農民美術運動に参加

平塚、棟方に版画を指導

民藝運動に参加

民藝運動に参加、離れる

民藝運動に根回し、参加

民藝運動に参加

武井、夢二にあこがれ絵画の世界へ

有坂、農民美術の人形を何度も雑誌、書物で批判

料治、創作版画運動に影響を受ける

『白と黒』で民藝合流以前の棟方を特集

版画で交流を深める

美術学校以来（棟方が）つながり続く交流を持つ

1928 秋田県大湯村木彫講習会で出会い親交を結ぶ

『版芸術』で特集

刊本頒布など

吾八で販売等

棟方から購入 広瀬の屏風など

1935,1936とタウトは秋田を訪問。勝平とタウト熱い友情を交わす

棟方が世に出る前より交流し、晩年まで親しく

表紙画を勝平が担当

『赤い靴』『月の砂漠』『雨降お地蔵』『ドンブラコ』『桃太郎』『浦島太郎』『かぐや姫』『金太郎』『舌切雀』『花咲爺』『ねずみの嫁入り』『一寸法師』『かちかち山』『こがね丸』『ごんぎつね』『赤い鳥』『赤い靴』『月の砂漠』『雨降お地蔵』『ドンブラコ』『桃太郎』『浦島太郎』『かぐや姫』『金太郎』『舌切雀』『花咲爺』『ねずみの嫁入り』『一寸法師』『かちかち山』『こがね丸』『ごんぎつね』

リーメ、動いてくださいました

1933　タウト、仙台の工芸指導所で嘱託として指導

柳田國男著『雪國の民俗』（1944）の疎開、棟方板画を勝平が担当

『普江真登のこと』執筆（1942）

タウトを日本に招聘／秋田に同行

1933 浅草六区でビールを飲み交わし工芸の「質」について語らう

高崎の工藝運動を協働

1935「ミラテス」を協働

1933『建築工芸アイシーオール』でタウト建築を特集

こけしを通じて友人となる

夢二、農民美術運動に触発され棟名山美術研究所を構想

秋田で交流

『アオイ書房』で出版

勝平、夢二あこがれ 絵画の世界へ

天江、夢二にあこがれ 高校時代より夢二と交流

童本、夢二が柳屋の様なデザイン

「柳屋書店」で販売、交流

「柳屋書店」を通じて交流

三好、外骨の部下として『滑稽新聞』の発行人、編集人をつとめる

「アオイ書房」から豪華本出版。武井武雄刊本作品のきっかけとなる

武井、恩地孝四郎から志茂を紹介され「アオイ書房」で出版

「どんたく図案社」を結成

夢二の会

『書窓』

『草園』

「自分の肖像」執筆（1935）

1932 川喜田、高崎で構成教育の講習会

1934 タウト『婦人之友』に「近代的住宅」執筆

1935『婦人之友』で「日本人の性格」の座談会

羽仁もと子、山本鼎を自由学園の初代美術科主任として招聘

1917『日茅会』で日本の民家の調査

柳宗悦［1889-1961］

東京都生れの思想家、美学者、宗教哲学者。浅川伯教が手土産に持参した染付秋草文面取壺をみたことをきっかけに朝鮮の工芸品に心魅かれる。その後、無名の職人が作れら民衆の日常品に美を見出し、それら を蒐集する旅に出かける。1929年に『日本民藝美術館設立趣意書』を発表し、民藝運動を提唱した。1931年に雑誌『工藝』を創刊。晩年は宗教思想に沈潜して美と宗教の世界を深めた。

平塚運一［1895-1997］

島根県生れの版画家。石井柏亭に洋画を学び、さらに伊上凡骨に彫版術を学ぶ。山本鼎の農民美術育成運動に参加。棟方志功らと版画随筆雑誌『版』を創刊。また東美校や北京国立芸術専科学校で木版画を指導する。昭和37年（1962）渡米しワシントンに定住、日米両国で個展を開くなど日本創作版画の第一人者として活躍した。

山本鼎［1882-1946］

愛知県生れ、長野県上田市育ちの洋画家、版画家。子供は自由に絵を描くべきとした児童自由画教育運動（1919）、版画を表現に高めんとした創作版画運動、農閑期の副業として農民芸術的美しさを備えた生活雑貨を作り、都市へ向けて販売する農民美術運動（1919）をはじめた。東北から九州まで全国各地で土産品製作講習会を行い、農民美術生産組合を組織した。自由学園の初代美術科主任であり、子供の友（主婦の友社）などでも連載。

木村五郎［1892-1972］

東京都生れの彫刻家。農民美術運動に参加し、昭和2年（1927）から日本農民美術研究所嘱託として各地の講習会で「木彫人形を指導。伊豆大島のあんこ人形なども考案。勝平と親しくなる。

料治熊太［1899-1982］

岡山県生れの出版人。雑誌記者として働き始め、博文館の雑誌『太陽』の編集に携わる。会津八一の門下となり戦後は古美術の研究家として知られている。昭和4年（1929）から16年（1941）まで、版画雑誌『白と黒』『版芸術』などを版元として手がけ、民藝合流以前の棟方志功、前川千帆、板画生、川上澄生、谷中安規らを取り上げた。戦前は料治朝鳴名義で自身も版画を創作、創生玩具運動にも関わった。

山内金三郎［1886-1966］

大阪府生れ。画家名は山内神斧。前田青邨と二人で稚田平古の画塾に寄宿し、日本画を学び卒業後、明治44年、小美術店『吾八』を開き大津絵、泥絵、絵馬、ガラス絵、郷土玩具などを扱う。大正7年芸艸堂より『寿々―Ⅱ』発刊。昭和12年東京西銀座に『吾八』（第2次）を開店。たしかに中流通のパイオニア。棟方志功、芹沢銈介、川上澄生、武井武雄らの刊本を多数頒布した。

武井武雄［1894-1983］

長野県岡谷市生れの童画家、版画家、童話作家。子供時代にとけしやゴム人形、郷土玩具コレクター、研究者でもあった。日本全国の郷土玩具を体系的に紹介した『日本郷土玩具』（1934）を刊行し、郷土玩具ブームの火付け役となった。東京こけし友の会の設立にも関わる。「趣味の思想化」を体現したような生き方であり、「余技」の実践者でもある。「棟の会」をはじめ多数の会や交友を持った。

平塚運一［1895-1997］

島根県生れの版画家。石井柏亭に洋画を学び、さらに伊上凡骨に彫版術を学ぶ。山本鼎の農民美術育成運動に参加。棟方志功らと版画随筆雑誌『版』を創刊。また東美校や北京国立芸術専科学校で木版画を指導する。昭和37年（1962）渡米しワシントンに定住、日米両国で個展を開くなど日本創作版画の第一人者として活躍した。

富本憲吉［1886-1963］

奈良県生れの陶芸家。1910年にイギリス留学から帰国。奈良・安堵の自邸では、古今東西の美術、工芸品とともに自作の刺繍や版画で飾り「小芸術」を実践する。1912年に「ウィリアム・モリスの話」を美術新報に発表。「民間芸術」を提唱し、生活雑器、歌謡、舞踊、織物、染物や木工に着目する。1926年に柳らとともに日本民藝美術館設立趣意書」を発表するが、次第に距離をおくことになる。

棟方志功［1903-1975］

青森県生れの版画家。1936年の第11回国画会展に天和し美し版画巻を出品。柳宗悦に「国展に化け物があらわれた」と言わしめるほどの衝撃を与えた。河井寛次郎・濱田庄司らとの交流によりその作品をより一段と飛躍させる。山内金三郎の吾八、天江富弥など縁の人々とも幅広い交友を持った。

柳田國男［1875-1962］

兵庫県生れの民俗学者。農商務省に入り、法制局参事官、貴族院書記官長を歴任。1913年に雑誌『郷土研究』を創刊。1916年に民家調査『白茅会』を結成。1935年には民間伝承の会を創始して、日本民俗学の確立と研究普及に努めた。『遠野物語』『石神問答』『民間伝承論』『海上の道』をはじめとした膨大な著作がある。

式場隆三郎［1898-1965］

新潟県生れの精神科医、民藝運動家。文芸の世界に憧れ『白樺派』の作家たちや柳宗悦、バーナード・リーチなどと親交を持つ。文芸や芸術創造活動と人の精神的な問題とのかかわりに関心を寄せ著作も多い。東京深川に建てられた怪建築『二笑亭』についての記録『二笑亭綺譚』、裸の大将と山下清の才能に注目し、その活動を物心両面から支え世間に広く紹介した。

バーナード・リーチ［1887-1979］

香港生れのイギリス人の陶芸家。幼児期を日本で過ごす。日本への憧れを強くし、1909年に再来日。『白樺派』の人々や柳宗悦らと親交を結ぶ。趣味人・淡島寒月の紹介で1911年に富本憲吉ら六代目尾形乾山に入門。その後、千葉・我孫子の柳邸内に窯を築いて作陶を始める。1923年にイギリスのセント・アイヴスに登窯を築き、リーチ工房を設立した。

西川友武［1904-1974］

東京都生れのインダストリアルデザイナー。商工省工芸指導所意匠部長をつとめ、昭和8年パリのアルミニウムの椅子のデザイン国際コンクールでグランプリを受賞。郷土玩具やけしけし電電し、戦前は来るべき新しい玩具に関する著作、工芸エッセイを多く書いた。戦後、日本電報通信社（現電通）に入社。

上野伊三郎［1892-1972］

京都府生れの建築家。1924年にヨーゼフ・ホフマンのウィーン工房に入所、工芸家のリチと結婚。1927年に本野精吾らと日本インターナショナル建築会を結成。1933年にタウトを日本に招聘し、秋田をはじめ日本各地を旅する。1936年にタウトの紹介で高崎の群馬県工芸研究所所長に就任。1963年にインターナショナルデザイン研究所を設立。

ブルーノ・タウト［1880-1938］

ドイツ・東プロイセンケーニヒスベルク生れの建築家。第一次世界大戦後に都市復興計画に関わり多くの集合住宅を手がけた。1933年に台頭するナチスを避け、日本インターナショナル建築会の招聘を受けて来日。宮城県の仙台の国立工芸指導所や群馬県の工業試験場高崎分場の嘱託として工芸品のデザイン・技術指導を行う。1938年6月ユ1938年2月に秋田を訪れ、勝平得之と交流する。

井上房一郎［1898-1993］

高崎市生れの実業家。山本鼎の影響を受け、1933年にパリに留学。留学中に絵画彫刻から建築・工芸へと関心を広げる。帰国後、工芸運動に力を注ぎ、1934年をブルーノタウトを高崎に招き、1935年に東京銀座に工芸品店『ミラテス』を開業。戦後は群馬交響楽団、群馬県立近代美術館の設立、群馬音楽センターの建設に関わる。

川喜田煉七郎［1902-1975］

東京都生れの建築家、デザイナー、教育者。1938年、ウクライナのハリコフ劇場建築国際設計競技に4位入選。雑誌『建築工芸アイシーオール』でいち早くタウトの建築思想を紹介する。1932年に東京・駒場で「新建築工芸研究所」を開校し、バウハウスの教育プログラムを導入。タウトの日記には『小型バウ・ハウス』「厳密な理論で飾った遊びごと」と記される。

今和次郎［1888-1973］

青森県弘前市生れの建築学者、生活学者。1916年に民俗学者・柳田国男の民家調査「白茅会」に参加する。1922年に『日本の民家』を刊行。関東大震災後は、東京の街の様子や人々の生活の変化を採集した考現学」「バラック装飾社」などの活動で知られる。戦後になると、日常生活を考察する生活学や服装研究といった新しい学問領域も開拓する。

羽仁もと子［1873-1957］

青森県生れの教育家。1899年に報知新聞社に入社、日本最初の婦人記者となった。夫羽仁吉一とともに（1908年に改称）を創刊。1921年に自由学園を創立。「思想しつつ生活しつつ」をモットーに、キリスト教と自由主義の結合を目ざす。生活の近代化、合理化や教育そして婦人の生き方について積極的に発言した。

天江富弥［1899-1984］

宮城県生。天賞酒造の次男。1921年、仙台で『おてんとさん社』を結成して、日本初の児童文学専門誌『おてんとさん』を創刊。野口雨情や竹久夢二、草野心平、土井晩翠などと幅広い交流関係をもつ。昭和2年（1932）仙台市の文化誌『郷玩店』小芥子洞』を開業し、昭和3年（1928）にけしけしを体系的に扱った日本初の文献『けし』を出版。「自分の話」を長年、東北の玩具・こけしが、全国的に有名になるきっかけを作った。

竹久夢二［1884-1934］

岡山県生れの画家、詩人。数多くの美人画を残しており、その浮世的な作品は『夢二式美人』と呼ばれた。大正ロマンを代表する画家で、「大正の浮世絵師」などと呼ばれた。また、児童雑誌や詩文の挿絵も描いた。文筆の分野でも、詩、歌謡、童話など創作。また、多くの書籍の装幀、広告意匠物、日用雑貨のほか、浴衣などのデザイン も手がけており、日本の近代グラフィック・デザインの草分けの一人ともいえる。

恩地孝四郎［1891-1955］

東京都生れの版画家、美術家、装幀家。竹久夢二にあこがれ美術の世界へ。抽象画（特に版画の抽象表現）の先駆者、また日本の版画界のリーダーとして大きな足跡を残す。隣人であった志茂太郎と夢二好きを通じて交流。志茂の紹介で武井武雄らとも交流。アオイ書房（志茂太郎版元）ではアートディレクター的な働きをする。恩地の民藝嫌いは当時はよく知られていた。

志茂太郎［1900-1980］

岡山県久米郡生れの出版人。『伊勢元酒店』店主。『アオイ書房』日本愛書家会主催。1935年、『日本書票協会』を立ち上げる。中野時代、竹久夢二を接点に近所に住んでいた恩地孝四郎と親しくなり伝説の雑誌『書窓』（アオイ書房）では武井武雄の刊本作品へのきっかけも作った。美しい本を作ることに生涯を捧げた。写植機導入のパイオニアとしても知られる。

三好米吉［1881-1943］

兵庫県神戸市生れ。古書籍美術店『柳屋書店』店主。明治43年（1910）開業。趣味の雑誌『美術と文芸』その後『柳屋』を発行した。宮武外骨の『滑稽新聞』発行人、編集人。与謝野晶子・鉄幹等と交流。書店をキャラリー化した。竹久夢二や富本憲吉が様々なデザインを手がけた。『港屋』閉店後は様々な夢二の雑貨を引き継いだ。

宮武外骨［1867-1955］

香川県生れのジャーナリスト、風俗史・新聞史研究家。幼名を亀四郎と称したが、亀の外骨内肉にちなみ外骨と改名。高松栄義塾、進文学舎で漢学を学ぶ。1888年に東京で頓智協会を設立。『頓智協会雑誌』で大日本帝国憲法発布をパロディ化し、不敬罪に問われた。1901年に「過激」にして愛嬌ある雑誌『滑稽新聞』を創刊した。

有坂與太郎［1896-1961］

東京都生れの郷土玩具研究者、収集家。郷土玩具の出版を勢力的に行い、郷土玩具運動のリーダー的存在だった。出版社・建設社を立ち上げ。伝統は絶たないが地域性を持つという創生玩具を提唱し、普及。農民美術の批判者でもあった。1929年、収集した玩具を収蔵・展示する玩具博物館・蘇民将来塔を建設するも戦災で焼失。趣味集団であった三田平凡寺（1876-1969）の我楽他宗（1919-1940）にも若手として参加していた。

川崎巨泉［1877-1942］

大阪府堺市生れの画家、図案家、幼少より絵が得意で、明治25年（1892）、当時堺市に住んでいた上方風俗画家の第一人者・中井芳瀧に入門。明治36、7年頃から各地の郷土玩具に興味を抱きはじめ、主に郷土玩具を描くようになる。近代化のもとで廃れていく郷土玩具がもつ庶民美を高く評価し、写生画を残すだけでなく、郷土玩具研究会を主催、又『人魚』などの研究会誌を発行して、その民俗学的価値を追求した。

料治熊太［1899-1982］

岡山県生れの出版人。雑誌記者として働き始め、博文館の雑誌『太陽』の編集に携わる。会津八一の門下となり戦後は古美術の研究家として知られている。昭和4年（1929）から16年（1941）まで、版画雑誌『白と黒』『版芸術』などを版元として手がけ、民藝合流以前の棟方志功、前川千帆、板画生、川上澄生、谷中安規らを取り上げた。戦前は料治朝鳴名義で自身も版画を創作、創生玩具運動にも関わった。

武井武雄［1894-1983］

長野県岡谷市生れの童画家、版画家、童話作家。子供時代にとけしやゴム人形、郷土玩具コレクター、研究者でもあった。日本全国の郷土玩具を体系的に紹介した『日本郷土玩具』（1934）を刊行し、郷土玩具ブームの火付け役となった。東京こけし友の会の設立にも関わる。「趣味の思想化」を体現したような生き方であり、「余技」の実践者でもある。「棟の会」をはじめ多数の会や交友を持った。

山内金三郎［1886-1966］

大阪府生れ。画家名は山内神斧。前田青邨と二人で稚田平古の画塾に寄宿し、日本画を学び卒業後、明治44年、小美術店『吾八』を開き大津絵、泥絵、絵馬、ガラス絵、郷土玩具などを扱う。大正7年芸艸堂より『寿々―Ⅱ』発刊。昭和12年東京西銀座に『吾八』（第2次）を開店。たしかに中流通のパイオニア。棟方志功、芹沢銈介、川上澄生、武井武雄らの刊本を多数頒布した。

藤田嗣治［1886-1968］

東京都生れのフランスの画家・彫刻家。第一次世界大戦前よりフランスのパリで活動。猫と女を得意な画題とし、日本画の技法を油彩画に取り入れつつ、独自の「乳白色の肌」とよばれた裸婦像などは西洋画壇の絶賛を浴びた。エコール・ド・パリの代表的な画家。フランスに帰化後の洗礼名はレオナール・ツグハル・フジタ。世界中を旅していた。

棟方志功［1903-1975］

青森県生れの版画家。1936年の第11回国画会展に天和し美し版画巻を出品。柳宗悦に「国展に化け物があらわれた」と言わしめるほどの衝撃を与えた。河井寛次郎・濱田庄司らとの交流によりその作品をより一段と飛躍させる。山内金三郎の吾八、天江富弥など縁の人々とも幅広い交友を持った。

料治熊太［1899-1982］

岡山県生れの出版人。雑誌記者として働き始め、博文館の雑誌『太陽』の編集に携わる。会津八一の門下となり戦後は古美術の研究家として知られている。昭和4年（1929）から16年（1941）まで、版画雑誌『白と黒』『版芸術』などを版元として手がけ、民藝合流以前の棟方志功、前川千帆、板画生、川上澄生、谷中安規らを取り上げた。戦前は料治朝鳴名義で自身も版画を創作、創生玩具運動にも関わった。

武井武雄［1894-1983］

長野県岡谷市生れの童画家、版画家、童話作家。子供時代にとけしやゴム人形、郷土玩具コレクター、研究者でもあった。日本全国の郷土玩具を体系的に紹介した『日本郷土玩具』（1934）を刊行し、郷土玩具ブームの火付け役となった。東京こけし友の会の設立にも関わる。「趣味の思想化」を体現したような生き方であり、「余技」の実践者でもある。「棟の会」をはじめ多数の会や交友を持った。

式場隆三郎［1898-1965］

新潟県生れの精神科医、民藝運動家。文芸の世界に憧れ『白樺派』の作家たちや柳宗悦、バーナード・リーチなどと親交を持つ。文芸や芸術創造活動と人の精神的な問題とのかかわりに関心を寄せ著作も多い。東京深川に建てられた怪建築『二笑亭』についての記録『二笑亭綺譚』、裸の大将と山下清の才能に注目し、その活動を物心両面から支え世間に広く紹介した。

柳田國男［1875-1962］

兵庫県生れの民俗学者。農商務省に入り、法制局参事官、貴族院書記官長を歴任。1913年に雑誌『郷土研究』を創刊。1916年に民家調査『白茅会』を結成。1935年には民間伝承の会を創始して、日本民俗学の確立と研究普及に努めた。『遠野物語』『石神問答』『民間伝承論』『海上の道』をはじめとした膨大な著作がある。

上野伊三郎［1892-1972］

京都府生れの建築家。1924年にヨーゼフ・ホフマンのウィーン工房に入所、工芸家のリチと結婚。1927年に本野精吾らと日本インターナショナル建築会を結成。1933年にタウトを日本に招聘し、秋田をはじめ日本各地を旅する。1936年にタウトの紹介で高崎の群馬県工芸研究所所長に就任。1963年にインターナショナルデザイン研究所を設立。

井上房一郎［1898-1993］

高崎市生れの実業家。山本鼎の影響を受け、1933年にパリに留学。留学中に絵画彫刻から建築・工芸へと関心を広げる。帰国後、工芸運動に力を注ぎ、1934年をブルーノタウトを高崎に招き、1935年に東京銀座に工芸品店『ミラテス』を開業。戦後は群馬交響楽団、群馬県立近代美術館の設立、群馬音楽センターの建設に関わる。

羽仁もと子［1873-1957］

青森県生れの教育家。1899年に報知新聞社に入社、日本最初の婦人記者となった。夫羽仁吉一とともに（1908年に改称）を創刊。1921年に自由学園を創立。「思想しつつ生活しつつ」をモットーに、キリスト教と自由主義の結合を目ざす。生活の近代化、合理化や教育そして婦人の生き方について積極的に発言した。

今和次郎［1888-1973］

青森県弘前市生れの建築学者、生活学者。1916年に民俗学者・柳田国男の民家調査「白茅会」に参加する。1922年に『日本の民家』を刊行。関東大震災後は、東京の街の様子や人々の生活の変化を採集した考現学」「バラック装飾社」などの活動で知られる。戦後になると、日常生活を考察する生活学や服装研究といった新しい学問領域も開拓する。

相関図作成／軸原ヨウスケ＆中村裕太
2020年4月20日発行
秋田公立美術大学、NPO法人アーツセンターあきた
〒010-1632 秋田市新屋大川町12-3 秋田公立美術大学
アトリエももさだ内（NPO法人アーツセンターあきた）
Tel 018-888-8137　E-mail info@artscenter-akita.jp